

第三回俳句賞「5」奨励賞

地を出る

名古屋高等学校

控へめに畳みて飛行機の毛布
セーターの伸びやかソーキそば啜る
潮風の吸ひ付く頬や冬浅し
中古車は開けつ放しのまま時雨
帰り花シーサーの爪輝きぬ
申し訳程度のひかり冬雲雀
冬麗や丸く尖りて珊瑚礁
甲板の手摺を小夏日の潮か
持ち上げて海鼠に足のやうなもの
銃痕は石となり柊の花
オレンジに灯り寒夜の名護の海
凧に晒されてゐてタコライス
室咲や色鉛筆の一包み
平和記念公園てふを冬の蝶
慰霊碑を離れて裸木の二三
冬の蚊や靴を削れる石畳
ランタンを灯して着膨れの横顔
冬の虹車窓を船とすれ違ふ
十二月八日地を出る珍穴子
枯蔦や香炉は雨を留めをり
ガジュマルの皺ふかぶかと息白し
冬晴れや右へ左へ軍用機
シートベルト腕に貼り付き冬霞
琉球の空を靡ける蒲団かな